

# Sherpas of Kathmandu

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/5152">http://hdl.handle.net/2297/5152</a>

## カトマンズのシェルパ社会

— シェルパ・サービス・センターの組織と活動を中心に —

鹿野 勝彦

- I はじめに
- II シェルパのカトマンズへの移住
  - 1. 前史—1960年代前半まで
  - 2. 1960年代後半—1970年代
  - 3. 1980年代—1990年代前半
- III カトマンズのシェルパ社会とシェルパ・サービス・センター
  - 1. シェルパ・サービス・センターの成立と組織
  - 2. シェルパ・サービス・センターの活動
  - 3. カトマンズのシェルパ社会とシェルパ・サービス・センター
- IV カトマンズにおけるシェルパ
- V おわりに

### I はじめに

本稿ではネパール東北部山地のソル・クンプ (Solu Khumbu) 地方を故地とする民族集団シェルパ (Sherpa) に属する人々の、主として1960年代後半から1990年代前半にかけての、ネパールの首都カトマンズへの移住、定着の過程と背景、およびそこに形成されたシェルパ社会のありかたと彼らを取りまく状況へのシェルパ自身の対応を、特に1970年代はじめにカトマンズに成立した「シェルパ・サービス・センター」(Sherpa Sewa Khendra—以下、本文中ではSSKと表記)に焦点をあてながら、記述、分析する。シェルパはネパール山地部に住む民族集団の中でも、早くより文化人類学の研究対象としてとりあげられ、いわゆる伝統的な文化、社会についてのみでなく、近年の社会変化の過程についても多くの研究蓄積がなされているが(例えば、BROWER: 1991, FISHER: 1990, FÜRER-HAIMENDORF: 1984, STEVENS: 1993, 鹿野: 1993, なおPFLEIDERER & BERGNER: 1990参照)、それらのほとんどはソル・クンプ地方のシェルパ社会を主対象としている。しかし後述するように、シェルパの人口の少なからぬ部分が、遅くとも今世紀はじめから1940年代半ばまでは英領インドのダージリンとその周辺へ、また1960年代後半から現在にかけてはカトマンズへと出稼ぎにゆき、あるいは移住していった。これら、故地の村落から都市へ移住した人々は、そこでシェルパとしての一定の社会的まとまりと民族集団としてのアイデンティティを維持するとともに、ソル・クンプのシェルパともつながりを保ち、相互に影響を与えてきた。

しかし、そのような都市部への移動、定着の過程や背景、あるいは定着先の社会そのものについての具体的、実証的な記述、分析は、これまでのところきわめて乏しい。<sup>1)</sup>

しかし、近年のネパール山地部においては、しだいに市場経済や国家による行政、教育への組みこみ、あるいは首都からの情報の浸透などが進み、さまざまな問題をはらみながら、国家の中心としての首都とのかかわりが強化されつつあるといえよう。本稿が直接扱う対象はシェルパに限られるが、そこでの問題は、個別には著しく多様な形をとるにせよ、ネパール山地に故地をもつすべての民族集団に共通する基盤をもつとも考えられる。本稿はその意味では、そういった大きな問題に取り組むための、部分的かつ初歩的な試みの一部である。

## II シェルパのカトマンズへの移住

### 1. 前史—1960年代前半まで

シェルパのカトマンズへの移住が本格化しはじめるのは1960年代後半以降であるが、それ以前にも周知のように、ソル・クンプは外部世界と密接なつながりをもっていた。すなわち、ソル・クンプのシェルパの基本的な生業は、地域や村、世帯によって具体的なありかたは多様であったにせよ、基本的には農業、牧畜、交易の組み合わせによっていたのであり、その交易活動の範囲は、北はチベット高原、南はインド平原の都市部に及んでいた。ただ、その交易ルートは主には東部ネパールの南北の延長線上にあって、カトマンズを中心とするネパール中央部とのつながりはむしろ稀薄であり、シェルパがカトマンズと往来することも、カトマンズからソル・クンプへ人が訪れることも、今世紀前半まではごく限られていた。むしろ、19世紀半ばに成立した、いわゆるヒル・ステーションとしてのダージリンとソル・クンプのシェルパとのつながりは、19世紀末以降、当初は交易旅行の通過、中継地として、ついで建設労働や茶園労働などの出稼ぎの対象地として、急速に強化されてゆく。そして、1920年代以降、ダージリンがヒマラヤの高峰を目指す登山隊の根拠地となったことが、ダージリンとシェルパの結びつきのありかたを、決定的に方向づける転機となった。登山隊の高所ポーターという、危険ではあっても高い収入を得られる職域をシェルパはほぼ独占し、後にその民族集団の名称は、ヒマラヤ登山の高所ポーターと同義で用いられるようにさえなる。ソル・クンプ、特にクンプからは、まず若い野心的な男性が高所ポーターの職を求めてダージリンへ移住するようになり、ついで女性や高齢者も加わって、ダージリンにはシェルパ世帯の居住区が形成されてゆく (ORTNER: 1989, 101-105, 鹿野: 1975, 1985, 1986)。この時期のダージリンにおけるシェルパの人口については、具体的な資料が乏しく、かつ「シェルパ」というカテゴリー自体も、「ネパールから来た(ないしはネパールを経由して来た)チベット系の人々」というあいまいな性格をもっていたため、あきらかではないが、20世紀初頭ですでに数千人を越え (鹿野: 1993, 98-100)、

その後も着実に増え続けていたようである。もっともヒマラヤの高所登山は、1930年代末以降、第2次大戦の影響で中断し、1950年代に再開してからまもなく、主な舞台がネパール・ヒマラヤに移ったために、ダージリンはその主要な根拠地としての性格を失ってしまう。このような過程自体、興味ある問題を含んでいるが、ここではソル・クンプのシェルパにとって、都市への出稼ぎや移住の経験は、1950年代以降のカトマンズへのそれに先立って、すでに19世紀末以来、ダージリンにおいて蓄積されていたことだけを指摘しておく。

1950年にネパールが外国からの旅行者に門戸を開放し、欧米や日本などから多くの登山隊、徒歩旅行者（トレッカー）がネパールを訪れるようになると、シェルパを取りまく状況は大きく変化した。かつてのダージリンの、登山隊やトレッカーの根拠地としての役割は、カトマンズに取って替わられた。また、ソル・クンプ、とりわけクンプは、登山隊やトレッカーの活動の主要な場として脚光を浴びるようになり、登山やトレッキングを含む観光は、ネパールで外貨収入を見込める、数少い有力な産業となってゆく。高所ポーターやトレッキングガイドの需要は増加し、1960年代はじめには、カトマンズに、まずヨーロッパ人やネパール人ブラーマンの経営する、高所ポーター、ガイドの斡旋会社が開業した。一方で1959年のチベット動乱の影響を受けて、シェルパの重要な生業の一部であったヒマラヤ越えの交易は決定的な打撃を受け、高所ポーター、ガイドの職からの収入の重要性は、一層高まっていった。

高所ポーターやガイドの職に就こうとする者は、登山、トレッキングのシーズン前にカトマンズへ行き、そこで間借り生活をして待機するようになった。彼らは主にクンプ出身の男性で、親戚、友人などとグループで市の中心部のネワールの住居密集地帯に間借りし、簡素な生活をしながら職を探し、職を得た者から順次出てゆくとともに、新たにカトマンズへ出かけ、ないし戻ってきた者を受け入れてゆく。登山隊の雇用は主に春と秋で各々約2～4カ月、トレッキングはこれに冬が加わり、雇用期間は1週間から2カ月程度と幅があったが、いずれにせよ一定期間働いた者は、賃金やカトマンズで購入した衣服、装身具、調度、食品などとともに、ソル・クンプの村々へもどっていった。それらの品々は、基本的には自家用、ないしは親戚、友人への土産などであり、売却を目的とする商品ではなかった。要するに、1950年代半ばから1960年代前半にかけて、ソル・クンプのシェルパ、とりわけクンプの高所ポーターやガイドを職業とする者は、かなりひんぱんにカトマンズとの間を往来するようになったが、彼らにとっては、そこは職を得るための待機場所であり、定住する者はまだほとんどいなかった。そこでのシェルパ同士の連絡は密で、相互扶助や社交は活発であったが、メンバーが流動的で滞在も短期、不定期であったために、組織はまだ成立していなかった。女性や高齢者、年少者がカトマンズを訪れる機会は、ごく限られていた。

## 2. 1960年代後半－1970年代

ネパールを訪れる外国人旅行者、特にシェルパにとって重要な顧客である登山隊やトレkkerの数は、1960年代後半から1970年代にかけて着実に増加し、クンプのみでなく、ソル・クンプ全域に住むシェルパの観光業への依存度はさらに高まってゆく。そのプロセスは、単に状況によってひきおこされたというより、シェルパ自身の主体的、選択的な対応による面が大きかった（鹿野：1993、110）。そして1960年代後半になると、高所ポーターやガイドに専念する若いシェルパーの一部は、カトマンズに定住するようになる。その中にはダージリンに見切りをつけて移住してきた者も、若干含まれていた。彼らの中でもある程度安定した収入を得られるようになった者は、結婚し、あるいは両親を呼びよせるなどして、世帯を形成する。このようにして1970年代半ばには、おそらく数百名をこえるシェルパが、カトマンズに定住するようになった。<sup>2)</sup> もっともそのほとんどは、相変わらず市の中心部のネワールの集住地区に、個別に間借りをして住んでいたため、ダージリンの場合と異なり、シェルパが排他的に居住する地域が形成されることはなかった。

カトマンズに定住するようになったシェルパの主要な職業は、いうまでもなく高所ポーターやガイドなどの賃労働であったが、それは彼らにとっては、他の職業に比べ資本や学歴が不要で高い水準の現金収入をもたらすなど、有利な条件を備えていたとはいえ、せいぜい数カ月を単位とする契約による、不安定でリスクの大きい職業でもあった。そこで彼らの一部は、賃労働を通じて蓄積した資本をもとに、登山、トレッキング用装備の店や、トレッキングの手配、ガイドの斡旋などを行う旅行代理店、あるいは主要なトレッキング・ルート沿いでのロッジ、レストラン、商店の経営などに乗りだすようになる。中でも主要なトレッキング対象地であるクンプの出身者は、その投資を自らの出身地の村々に向けたのに対し、主要なトレッキング対象地ではないソルの出身者の多くは、カトマンズに投資を向けてゆく傾向が強かったことが注目される。この時期には、カトマンズとソル・クンプのつながりは、交通、輸送事情の改善（カトマンズージリ間の道路建設やソル・クンプでの空港の開設など）や行政機構の整備、市場経済の浸透（ソル・クンプでの定期市、商店などの成立）などを通じて急速に強化されてきたが、その背景には、ネパールの主要な観光地の1つとなったソル・クンプへ、年々多くの外国からの旅行者が訪れるようになったこと、これに対応してカトマンズへ移住、定着したシェルパと、その出身地との間の密接な交流、連累が生じたことが指摘できる。

カトマンズに定着したシェルパは、一般に経済的には観光業、とりわけ登山やトレッキングという、ダージリン時代以来の、他の民族集団出身者の追従を許さない領域でのノウハウの蓄積を通じて、経済的にはかなりの成功を納めていたが、社会的にはなお不安定な状況におかれていた。まずシェルパは、カトマンズにおいては新来の絶対的な少数者であり、そこで多数者であるとともに、政治的にも社会的にも上層を占めるパルバテ・ヒンドゥー

やネットワークの上層カースト成員からは、他のチベット系住民とともに一括して、いわゆる「ボテ」として底辺近く位置づけられる存在であった。シェルパの多くは山村の生活習慣をそのまま持ちこんでくる田舎者であり、学歴も低く、国語であるネパール語を話せない者も高齢者や女性には多かった。こういった一般的な状況に加え、カトマンズに定着したシェルパにとって、特に大きな問題となったのは、結婚式や葬式など、重要な儀礼を行うための適当な場がないことであった。彼らのほとんどはなお間借り生活をしていた。<sup>3)</sup> SSKの結成は、当初、このような問題を解決することを主要な目的としていたが、それについてはⅢで改めて扱うこととする。

### 3. 1980年代－1990年代前半

カトマンズに定着したシェルパの人口は1980年代にも着実に増え続け、1991年にはおそらく1,500人を越えたと思われる。<sup>4)</sup> 人口増加とともに注目すべき点は、カトマンズで生まれ、ないしは10歳前後までの早い時期にソル・クンプから縁故をたよってカトマンズへ出てきた若年層が増加し、成長するとともに、カトマンズのシェルパ社会の中で重要な役割を演ずるようになったことであろう。カトマンズにおいてシェルパの第2世代が形成された、ということもできよう。彼らは第1世代の築いた経済的基盤の上になつて、比較的高い水準の学校教育を受け、ネパール語を母語同様に話す能力と都市的な生活のスタイルを自然に身に着けていった。

カトマンズのシェルパのおかれた全体的な状況も、一定の変化を見せる。経済的には、観光、それも登山、トレッキング関連部門に主に依存するという点は従来と同じであっても、具体的な職種は登山、トレッキング用の装備の製造や輸入、骨とうやじゅうたんなどの土産物の販売などが加わって多様化するとともに、自らが資本を投資し、経営するという自営化が進む。そしてソル・クンプからは、まず親戚や同郷者を頼ってカトマンズへ出、高所ポーターやガイドなどの賃金労働に従事して資本を蓄積した後、独立、自営するという定型も、ある程度確立する。

その一方で、成功したシェルパの間では子弟をカトマンズのみならず、ダーズリンやカリンポン、バンガロール、さらにはヨーロッパなどの寄宿制学校に留学させることがさかんになる。<sup>5)</sup> そのようにして高等教育を受けた第2世代からは、公務員や教師、エンジニア、パイロット、医師といった専門職に就く者、あるいは土木・建設工事の請負人（コントラクター）といった職種に進出する者も、しだいに増えてくる。

こうしてカトマンズで安定した経済的な基盤を得たシェルパは、土地や家屋を入手し、間借り生活から脱却するばかりでなく、家屋の一部を賃借しするなどして、さらにその基盤を強固なものにしてゆく。カトマンズ市内でのシェルパの居住地域は、市の中心部から、地価が安く住宅開発のさかんな周辺部、特に北部のマハラジガンジ (Maharajgunj) や北東部のボードナート (Buddhanath) 周辺へと広がっていった。

ここでパラク (Phalak クンブの南方) で生まれ、成人後、1970年にカトマンズに移住、定着した、いわば第1世代に属するSシェルパと、1972年に12歳で叔父を頼ってソルからカトマンズへ出てきた、いわば第2世代に属するA. T. シェルパの事例を見てみよう。

#### ・事例1 Sシェルパ

Sは1938年にパラクのK村で生まれ、1960年代前半から主に高所ポーターとしてフランス、アメリカ、日本などの登山隊に参加し、1970年代はじめにはサーダー (高所ポーター頭) を勤めるようになっていたが、1973年にカトマンズ市内の中心部に間借りして定住するようになった。それまでにすでに1度離婚し、再婚しており、K村の家と土地は最初の妻とその子供に譲っている。カトマンズに定住後は、1990年まで高所ポーター、ガイドとして仕事をするかたわら、1973年から1984年までは、住居とは別に借りた小さな店で妻に小規模なレストランを経営させ、1987年には市の中心部で、外国人観光客相手の店舗がもっとも集中するタメル (Thamel) に店舗を借りて、登山、トレッキング用品の販売、レンタルの店を開業した。また1990年には旅行代理店の免許を取り、タメルに別の事務所を借りて約1年間営業したが、これは「忙しすぎる」ので友人に権利を売って撤退した。住居は1973年以来、主に市の中心部で、少なくとも4回間借り先を変えたが、1988年にボードナート近くに土地を買い、1992年に3階建ての家を新築して、その3階に入居した。なお2階は間貸しにあて、1階は登山、トレッキング用品の縫製工場にするために空けたままである。2番目の妻との間の子供は2人で、いずれもカトマンズで高校を出たあと結婚して独立し、1人はポカラでトレッキング専門のガイドを、1人はパラクでロッジのマネージャーをしているが、Sはいずれカトマンズの店と縫製工場の経営をまかせたい、と考えている。

#### ・事例2 A. T. シェルパ

A. T. は1960年にソルのB村で生まれ、1972年に、すでにカトマンズでサーダーとして活躍していた父方の叔父であるS. G. を頼ってカトマンズへ出た。B村の小学校では5年級までを終えていたが、カトマンズでは高校で10年級までの教育を受け、その後は叔父の経営していたタメルの登山、トレッキング用品販売の店を手伝いながら、年に5～6回、トレッキングのガイドを行い、独立するための資金を貯えた。1982年にカトマンズ在住のチベット人の娘と結婚し、同時に独立してタメルに店舗を借り、登山用具店を開業する。1985年には友人と共同で旅行代理店の免許を取得し、主に韓国の登山隊、トレッカーを顧客としたが、1988年からそのつてを利用して韓国より直接、登山用具などを輸入するようになり、1990年からは原材料の布地、部品なども輸入し、カトマンズで縫製工場を運営するようになった。製品 (リュックサック、寝袋、レインパーカ、ウェストポーチなど) の一部は自分や叔父の店で小売りするが、大半は卸値で他の店へ売る。このような縫製工場は、カトマンズには、日常用のディパックのような小形の製品を作るものを含めればかなり多いが、登山、トレッキング用の大形の高級品を作る工場はなお少なく、そのほとんど

がシェルパの経営であるという。現在は、結婚後入居したタメルに近いアサン (Asang) の貸間に住んでいるが、近い将来は土地を購入し家を新築するつもりで、市の北部で物件を探している。3人の子供は現在はいずれもカトマンズ市内の小学校に通っているが、将来はダージリン周辺の寄宿学校へ入れるつもりでいる。(以上、1993年9月現在)

いうまでもなく、SやA. T. は、各々の世代としては、いわば理想的なプロセスを経て、カトマンズに生活の場を築きあげた成功者の例であり、ソル・クンプからカトマンズへ出てきたすべてのシェルパが、このようなコースを歩んできたわけではない。とはいえ、カトマンズのシェルパは全体として、1980年代以降の観光客の増加と多様化という状況に的確に対応し、いわゆる企業家的精神を発揮することによって、経済的により安定した地位を築いてきた。それはシェルパの場合、カトマンズばかりでなく、ソル・クンプ地域においても同様であり、他者に雇われる賃労働から自営的経営へ、そして子女の教育投資へというプロセスは、そこでもあきらかに認められる (FISHER: 1986, 鹿野: 1993)。<sup>6)</sup>

同時に、カトマンズのシェルパは、社会的にも、少なくとも表面的には、より安定した地位を占めるようになってきた。とりわけ第2世代の人々はネパール語を母語同様に、あるいは母語そのものとして話し、読み書きするようになり、都会の洗練された生活スタイルを、高い学歴とともに自然に身に着けるようになってきた。周囲からのいわゆる「ボテ」としての位置づけ自体は容易になくならないにせよ、観光を基幹産業とする国際都市としてのカトマンズにおいては、「チベットの」文化のにない手であり、ヒマラヤの高所登山の支え手として知名度の高いシェルパであることは、必ずしも不利ではない (鹿野: 1993, 109-110)。さらに1990年のいわゆる民主化以降、個々の民族集団とその文化の独自性の尊重が、いわば公認のイデオロギーとなったという事情もある。

だが、こういった変化は、他方でカトマンズのシェルパ社会に、新しい問題をひきおこすことになった。すなわちカトマンズで生まれ、ないしは幼少年期にソル・クンプを離れてカトマンズで育った第2世代の成長とともに、彼らとソル・クンプの (特にソルの)、あるいはシェルパ文化全体との結びつきが薄れ、カトマンズのシェルパの間では世代間のギャップが拡大してきた。第1世代の人々の間では、最近の若い者はシェルパ語もろくに話せず、仏教の信仰も弱まった、という危機意識がもたれるようになってきたのである。彼らにとって故郷であるソル・クンプも、若い世代にとっては顧客を送りこむための観光地にすぎないのだ、という者もいる。世代間のギャップの問題は、実はカトマンズのみでなく、ソル・クンプの村々でも生じているのだが、その深刻さの度合がカトマンズにおいてより著しいことは、おそらく否定しえない。

以上で述べたような、シェルパのカトマンズへの移住、定着のプロセスは、そこで組織され、活動、機能してきたSSKのありかたを見てゆくことによって、より具体的にあきらかになってくる。



### Ⅲ カトマンズのシェルパ社会とシェルパ・サービス・センター

#### 1. シェルパ・サービス・センターの成立と組織

カトマンズに定住するようになったシェルパの間での非組織的な相互扶助のネットワークは当初より存在したが、1975年には「シェルパ・サービス・センター」(SSK)が約15名の会員で、非公式に発足した。組織結成の目的は、カトマンズ在住のシェルパの相互扶助で、特に葬式や結婚式などをシェルパの伝統に基いて行うための集会所を建設することが、緊急かつ最大の課題であった。当時、カトマンズ在住のシェルパのかなりの部分が、すでに家族単位で生活するようになっていたが、そのほとんどはなお狭い部屋での間借り生活をしていたのである。SSKへの参加の呼びかけは好意的に受けとめられ、名簿が整備された1979年4月には会員数は270名に達していたが、これは当時のカトマンズ在住のシェルパのほとんどを網羅していたといわれる。役員組織、規約、会費などは1976年に定められ、専従の書記(ソル出身のネワール、有給)も1978年に雇用された。

会員は当初より世帯を単位としてその代表者名が登録され、規約上は理事会で承認されれば誰でも入会できるが、実際にはそのほとんどはカトマンズに定住するか、少なくとも1年のかなりの部分をカトマンズで過ごすシェルパであった。<sup>7)</sup> 役員は当初10名程度の理事で構成され、無給で任期も決まっておらず、欠員が生じたときは必要に応じて補充された。会費は入会金100ルピー、年会費25ルピーで、この金額は1989年まで固定されていた。1979年4月における、SSKの会員の出身地と世帯主の職業構成(これは1993年時点でのもの)をまとめたものが表-1である。

表-1 SSKの会員 出身地別職業構成(1979年までの入会者)

出身地	職					業				合計 (%)
	高所ポーター ガイド	トレッキング 用品店経営	旅行代理 店経営	ホテル、レス トラン経営	その他の 商 業	工事請負業 (コントラクター)	公 務 員 専 門 職	僧 侶	そ の 他 不 明	
ソル	43	2	7	1	18	1	5	5	17	99(36.7)
クンプ、パラク	81	4	14	2	12	2		3	12	130(48.1)
ジャナクプール県	1				4	2	1	3	9	20( 7.4)
バグマティ県					3			1	4	8( 3.0)
メチ県、コシ県	1	1			3				3	8( 3.0)
その他、不明	1				1				3	5( 1.9)
合 計 (%)	127(47.0)	7( 2.6)	21( 7.8)	3( 1.1)	41(15.2)	5( 1.9)	6( 2.2)	12( 4.4)	48(17.8)	270(100)

職業は1993年8月現在。「経営」は共同出資経営を含む。

SSKの組織は、カトマンズに定住するシェルパ人口の増加と、後述のように集会場建設が比較的短期間に実現したことから、1980年代以降も着実な拡大を続け、1993年8月には名簿登録者数が460名となった。表-2、表-3は、SSKの登録者数の年度別、出身地

別の推移と、1993年8月時点の、会員の出身地と世帯主の職業構成を示したものである。もっとも会員登録はいったんなされると、会員世帯のカトマンズからの転出や、後継ぎが無いままでの会員の死亡などがあっても抹消手続きがなかなかされないため、会費の納入率は1993年8月現在で登録者数の約80%である。また、後に見るように、集会所の利用者に非会員シェルパがかなり多いことから、最近ではカトマンズ在住のシェルパ人口が増加したほどには、会員が増えていない、特に独身者や経済的に貧しい者は、会費値上げ以降、入会しようとしなくなった、との指摘をするSSKの役員もいる。会員の増加を出身地から見ると、ソルおよびその西方のジャナクプール（Janakpur）、バグマティ（Bagmati）県出身者の増加が目立つ。このことは、シェルパの中で観光業にかかわる者が、ソル・クンプ出身者以外にも拡大していったこと、またクンプ出身者が出身地の村々にロッジ、レストランや商店などを経営する形で直接投資するのに対し、旅行者が訪れることの少ないその他の地方の出身者がカトマンズへ進出する傾向が著しいこと、などを反映しているよう。

表-2 SSKの会員 年度別、出身地別登録者数の推移

出身地	年 度										
	1979	1980~82		1983~85		1986~88		1989~91		1992~93.8	
		登録	計	登録	計	登録	計	登録	計	登録	計
ソル	99	12	111	10	121	20	141	22	163	20	183
クンプ, パラク	130	7	137	7	144	14	158	11	169	4	173
ジャナクプール県	20	2	22	11	33	7	40	19	59	2	61
バグマティ県	8	1	9	2	11	3	14	1	15	0	15
メチ県, コシ県	8	1	9	1	10	2	12	0	12	0	12
その他, 不明	5	4	9	5	14	1	15	1	16	0	16
合計	270	27	297	36	333	47	380	54	434	26	460

表-3 SSKの会員 出身地別職業構成（1993年8月）

出身地	職 業									合計 (%)
	高所ポーター ガイド	トレッキング 用品店経営	旅行代理 店経営	ホテル, レストラン 経営	その他の 商業	工事請負業 (コントラクター)	公務員 専門職	僧 侶	その他 不明	
ソル	78	3	9	2	39	4	8	12	28	183(39.8)
クンプ, パラク	97	5	24	5	13	2	5	3	19	173(37.6)
ジャナクプール県	2	1	1	1	18	11	1	6	20	61(13.3)
バグマティ県					8			1	6	15( 3.3)
メチ県, コシ県	1	2			3		1		5	12( 2.6)
その他, 不明	2				5				9	16( 3.5)
合計 (%)	180(39.1)	11( 2.4)	34( 7.4)	8( 1.7)	86(18.7)	17( 3.7)	15( 3.3)	22( 4.8)	87(18.9)	460(100)

「経営」は共同出資経営を含む。

また、会員の職種は、各種の専門職やカーペット工場経営、工事請負業などに多様化しており、観光業を通じて蓄積された資本が、他の業種や教育へ投資されたことを示していると思われる。

会費は1989年に入会金500ルピー、年会費100ルピーに値上げされた。この値上げは、一方ではいうまでもなく、物価の上昇を反映しているが、他方ではカトマンズ在住のシェルパの一般的な経済水準の向上も、ある程度意味していよう。

SSKの運営は、規約上は年1回開かれる総会が最高議決機関となっているが、実際には総会として開催された例はなく、運営は役員を中心になされている。役員選出方法も1983年に規約で理事、評議員各15名を総会で選出し、任期も1期4年とすると定められたが、実際には発足当初より理事会議長を勤めるS. G. シェルパをはじめとする数名の理事が、中核的な役割を果たし続けており、欠員が出来れば随時非公式の話し合いを通じて補充されてきた。これらの理事はいずれも1993年現在で50歳代前半までの男性であり、SSKの発足当時は40歳以下だったことになる。SSKの理事職は、したがって、1970年代前半にカトマンズに定住するようになった、若手の、高い実務能力を持つシェルパ達によって主になわれてきた、といてよい。彼らの多くは、高所ポーター、ガイドなどを経験しているが、比較的早くそれらの職から引退し、商店経営などの自営業に転進して成功した人々である。SSKの理事職は時間的にも経済的にも負担の大きい仕事であり、就任しても2～3年で退任する者も多く、その補充は容易でないという。理事会は定例化されていないが、平均すれば年に10回程度、必要に応じて開かれており、議題によっては、評議員や、次節で述べるラワ (lawā)、その他の委員が加わる。

一方、評議員は名誉職的な意味合いが強く、さまざまな寄金集め以外に実務的な役割を果たすことは少く、評議員全員が会合することもまずない。選出は理事による就任依頼を通じて行われ、出身地のバランスのほか、女性の代表、特定職種の代表といった面も考慮される。評議員はいったん就任すると、死亡、病気その他止むをえない事情がない限り、退任することは少い。

カトマンズのシェルパ社会においては、誰がSSKの役職者であるかは、理事会の議長であるS. G. シェルパを除けば、一般にはほとんど知られておらず、むしろ誰が各年度のどの行事のラワを勤めるかに強い関心がよせられる。

専従の書記は1978年以来、同一人物が勤めており、日常的な事務一切に責任を負っている。あえてシェルパ以外のネットワークを採用したのは、中立性を重視したためであるという。1982年に集会場が完成し、その一隅に仏間が設けられてからは、クンプ出身の僧侶が「役僧」(クニル khnil) として有給で雇用され、仏間の管理、清掃などを行っている。1993年時点でのSSKの理事・評議員についてまとめると表-4のようになる。

SSK は1990年には政府に正式に登録され、毎年、役員の名簿と活動報告、会計報告を提出するようになった。

表-4 S S K の 役 員 (1993年8月)

番号	役職名	出身地	職業	入会年	役員就任	備考
1	理事・議長	ソル	トレッキング用品店経営	1975	1975	創立メンバー
2	〃・副議長	ソル	旅行代理店経営	1975	1975	創立メンバー
3	〃・〃	ソル	商業	1976	1976	
4	〃・〃	ジャナクプール県	工事請負業	1981	1991	
5	〃・幹事	ソル	政治家(県会議員)	1975	1975	創立メンバー
6	〃・〃	クンプ	旅行代理店経営	1982	1982	
7	〃・〃	クンプ	公務員	1986	1986	
8	〃・会計	ソル	工事請負業	1975	1975	創立メンバー
9	〃	クンプ	旅行代理店経営	1975	1991	
10	〃	クンプ	〃	1978	1991	
11	〃	クンプ	商業	1978	1978	
12	〃	ソル	〃	1982	1982	
13	〃	ジャナクプール県	工事請負業	1983	1991	
14	〃	クンプ	ガイド	1986	1986	
15	〃	バグマティ県	商業	1989	1991	
16	評議員	ソル	僧侶	1975	1975	創立メンバー, 元理事
17	〃	メチ県	トレッキング用品店経営	1975	1975	創立メンバー, 元理事
18	〃	クンプ	レストラン経営	1976	1991	女性
19	〃	クンプ	ガイド	1978	1983	
20	〃	ソル	商業	1978	1978	元理事
21	〃	ソル	旅行代理店経営	1978	1983	
22	〃	ジャナクプール県	工事請負業	1978	1978	
23	〃	クンプ	ガイド	1979	1979	
24	〃	ソル	商業	1980	1980	女性
25	〃	ジャナクプール県	工事請負業	1986	1986	
26	〃	ソル	ガイド	1986	1986	
27	〃	コシ県	商業	1991	1991	
28	〃	欠員				
29	〃	〃				
30	〃	〃				

## 2. シェルパ・サービス・センターの活動

すでに述べたように、SSK 設立当初の最大の課題は、カトマンズ在住のシェルパが葬式や結婚式などの会合を行うための集会所を建設することであり、あわせて日常的な相互扶助のネットワークを作り、年中行事などを執行するための組織化をすることであった。いうまでもなく、後者の具体的活動は前者が達成されることにより、その場を保証されることになる。

集会所建設のための資金集めが正式に開始されたのは1978年からで、1980年にはボードナート近郊に約 3.5ロパニ (約1,700㎡) の土地を入手し、1982年には床面積約 540㎡の集会所 (鉄筋コンクリート) 1階部分が完成して利用が開始された。土地購入、集会所建設の総経費は不詳だが、約50万ルピーの寄付を集め、その他に賭博の公認されるティハール (tihar) の祭礼時に SSK が胴元となって賭場を開き、掛金の一部を資金にあてたという。募金は当時の理事がカトマンズ在住のシェルパを主な対象に、SSK の会員募集と平行しながら進め、一部はソル・クンプ在住のシェルパにも依頼したが、外国人などに寄付を依頼することはなかった。<sup>8)</sup> 土地、建物以外の設備、調度、什器などは、その後、年々の経常経費によって、順次購入されていった。SSK の発足後 8 年、実際の募金開始後 5 年たらずで、これだけの規模の集会所建設がなしとげられたことは、その事業運営にあたった理事集団の有能さとともに、カトマンズ在住のシェルパの経済水準の高さと、集会所をもつことへの願望の切実さを物語るものといえよう。この集会所は、本来 2 階建ての構想で、2 階部分はシェルパの属するチベット仏教のニンマ・パ (nyingma-pa) 様式の寺院とする予定であったが、1993年からはその 2 階部分を完成させるための募金が始まった。募金目標は250万ルピーで、やはり理事会を中心に募金がなされており、開始後 1 カ月で、目標の約20%が集まったという。

土地入手、建物建設は別として、SSK の活動の経常経費は、会員の入会金、会費と、集会所使用者の支払う使用料によってまかなわれている。その詳細については不詳であるが、1993-94会計年度の経常経費は約22万ルピーで、収入のおよそ20%が入会金、会費、80%が集会所使用料であり、支出のおよそ20%が有給職員 (書記、役僧) の人件費、25%が建物の維持管理と調度、什器の購入、補修費、30%が SSK の主催する諸行事の必要経費、10%が貧困者の葬式の補助などにあてられ、余剰分は建物の増築費に繰り入れられるという。この会計は、すべて書記が理事会の監督の下に管理している。

集会所が建設されて以来、そこはさまざまな形で利用されてきたが、その利用形態は大別すると、SSK が主催する、主として年中行事的な会合と、会員、非会員の個人が主催する通過儀礼やその他の会合とがある。前者はほぼ毎年、決まった時期に行われるもので、1993-94年にかけては、シェルパ暦の新年 (losar) 祭 (ハプスー hapsū)、仏陀生誕祭、ニンマ・パの始祖グル・リムポチェ (Guru Rimpoche) の入寂記念日 (ゴムゾ gomzo)、

雨期の祭（ファンギ fangi）、及びチベット暦の10日祭（ツェチュ tse-chu）が行われた（表-5）。

表-5 SSK 主催の会合

会合名	日程（シェルパ暦）	参加者（概数）	実施責任者
新年祭	1月1～2日（2日間）	2,000	ラワ 4人
仏陀生誕祭	3月15日	不明	委員会
ゴムゾ	4月3日	600	ラワ 8人
ファンギ	6月13日	100	ラワ 4人
ツェチュ	1～6, 8, 10, 12各月10日	毎回20～30	委員会

シェルパ暦、通年、西暦1993-94年相当。シェルパ暦1月1日は1993年2月20日。

これらの会合の実施、運営の責任は、いずれもラワとよばれる、会員が持ちまわりで就任する世話役、ないしはSSKの役員を中心に組織される委員会が負うことを原則としている。これらの会合のうち、仏陀生誕祭以外は、もともとソル・クンプ、またはその一部地域のシェルパ社会で行われている年中行事であるが、<sup>9)</sup> 具体的な実施の形態はそれぞれにかなり変化している。たとえば新年の祭は、ソル・クンプでは各戸別に祝われ、家々が相互に訪問しあうことはあっても、集落がまとまって大規模な会合を催すことはないが、カトマンズのシェルパの間では、すでに1970年ごろには、新年に若干名のラワが参加者から会費を集め、準備、運営の一切の責任を負って宴会を開いていた。場所としてはカトマンズ西部のスワヤンブー（Swayambhu）寺院の一角が用いられていたが、1980年にSSKが集会所用地を購入してからは、会場としてそこが用いられるようになり、現在に至っている。ラワは4名で、近年では、ソル、クンプ、ジャナクプール県、バグマティ県のそれぞれの出身者から1人ずつが選ばれるようになっている。西暦1993年2月に催された新年祭では、前もって発行された参加券（1人100ルピー）がおおよそ2,000枚に達したので、会員外の短期滞在者を含む、当時カトマンズに居たほとんどのシェルパが参加したものと思われる。ラワは参加券の売上収入で食事、飲物などの一切を用意する。当日は集会所中庭の旗柱にとりつける祈祷文を印刷した旗（ハプスー）を新しいものに取り換える儀礼の後、その年のラワと次年度のラワが紹介され、宴会となる。ラワの制度は、もともとソル・クンプでは、ドゥムジェ（dumje）など、村レベルの大規模な祭礼などの経費や労働を、全世帯が定められた順番に従って持ち回りで平等に負担するもので、ラワの役を果たすことは村の完全な成員であることを意味していた。しかしカトマンズでは、行事への参加世帯数が多く、かつ流動性が高いために、ラワは、それまで就任したことのない世帯で、就任を希望するもののうちから、理事会の調整を経て選任され、経費そのものは負担せず、もっ

ばら準備の労役だけを担当することになっている。

SSKの主催する会合としては、新年祭の他、ゴムゾとファンギがラワによって運営される。これらの集会は、カトマンズのシェルパの間では、1982年の集会所完成以後、開催されるようになった。ラワは、新年祭の場合と異なり、会合でふるまわれる飲食物や、ゴムゾにおける僧侶への布施など、経費の一切を負担する。ただし参加者の規模は新年祭に比べれば少なく、1993年の場合、ゴムゾは約600名、ファンギは約100名で、ラワの負担は、ゴムゾでは8名のラワが各々4,000ルピー、ファンギでは4名のラワが各々2,000ルピー程度だったという。ラワの選出方法自体は、出身地が特に考慮されないこと以外は、新年祭の場合とほぼ同様である。

一方、仏陀生誕祭とツェチュのためには、各々理事を中心とする委員会が組織され、経費も基本的にはSSK自体が負担している。仏陀生誕祭はシェルパ独自の行事ではなく、カトマンズの仏教徒全体の行事で、シェルパの参加者はSSKの集会所で独自の儀礼を行い、茶菓のふるまいを受けた後、市内でのパレードに参加する。ツェチュはチベット暦10日に僧侶を招いて、読経のあと食事をふるまい、布施を行うもので、一般のシェルパも任意で参加し、僧侶へのふるまいや布施に加わることもあるが、基本的には委員会のメンバーが交替でラワを勤める。この場合のラワは、経費負担はなく、世話役として労役を提供する。委員の人数や任期は、いずれも特に定まっておらず、理事の呼びかけに応じて、随時就任する。

集会所は、以上のようなSSKが主催する会合の他に、シェルパの会員、非会員、あるいはシェルパ以外の人々など、さまざまな個人が主催する会合にも利用されている。集会所の使用の予約は、15日前から受けつけており、個人の利用には、そのメンバーシップと会合目的によって、優先権と使用料に差があるが、原則として誰でも利用可能である。しかし実際にそこを利用するのは、シェルパ以外では、チベット人かタマン（Tamang）を含む、ネパール北部山地に故地をもつチベット仏教徒の民族集団に属し、カトマンズに在住しており、かつ、自集団がカトマンズに自由に利用できる集会所などの施設を持たない人々に、ほぼ限られている。

<sup>1) 1993年8月時点での、集会所の出身、目的別使用料と、1993-94年にかけての、シェルパ暦の1年間の、集会所の私的利用の主催者、目的を整理すると、表-6、表-7のようになる。</sup>

表-6 S S K 集会所の使用料金

会合目的	シエルパ		シエルパ外
	会 員	非 会 員	
葬 儀	無 料	無 料	認めない
死 者 供 養	1,200	2,000	4,000
そ の 他	1,500	2,500	4,000

単位：ネパール・ルピー  
1993-94年。全館24時間使用の場合。調度什器使用料を含む。

表-7 SSK 集会所での私的会合

会 合 目 的	シ エ ル パ			シェルパ外	合 計
	会 員	非 会 員	小 計		
葬 儀	5	29	34	—	34
死 者 供 養	8	21	29	3	32
結 婚 式	4	6	10	9	19
そ の 他	3	2	5	11	16
合 計	20	58	78	23*	101

シェルパ暦、通年、西暦1993-94年相当。

\*チベット人16、タマン4、その他3。

すなわち、この年度の集会所の私的利用回数は101回に及ぶが、その8割強は会員外による利用で、それもシェルパ以外の人々による利用がかなり多いことがわかる。利用目的からは葬式と死者供養が全体の約3分の2、シェルパの利用だけに限れば80%を占める。死者供養は、シェルパの場合、死後21日または45日目に、一般に葬儀よりはかなり大規模に行われ、できる限り多くの僧侶を招いて布施するとともに、参加者を供応する。盛大な死者供養では、僧侶はチベット人を含めて50人以上、参会者の総数は1,000名をこえることもあるという。シェルパ以外の人々は、葬儀に利用することは認められないので、結婚式やその他のパーティなどが主な使用目的となる。いずれにせよ、この集会所では、平均すれば3日に1度はなんらかの目的で会合が催され、数十人からときに1,000人を超える人々が参加していることになる。

### 3. カトマンズのシェルパ社会とシェルパ・サーヴィス・センター

カトマンズにおいてSSKが組織され、その集会所が建設されたことによって、カトマンズに住むシェルパは、さまざまな伝統的生活慣習を維持すること、とりわけ緊急の課題であった、葬式や死者供養を、チベット仏教のニンマ・パの伝統によって行うことを保証されるようになったが、集会所の建設が彼らの社会にもたらした意味は、いうまでもなくそれにとどまらない。カトマンズに移住してきたシェルパは、出身地の村やダージリンとは異なり、市内のいくつかの地域に分散して、圧倒的多数の他民族集団に属する人々の間で、少数者として生活するようになった。しかも彼らを全体としてみれば、出身地によって方言や習慣などに多少の差もあり、親戚、友人、同郷者の間での、個別の相互扶助や交流はかなり密にあったにせよ、シェルパ全体としてまとまることは、意識の上でも、具体的な行動としても、なお困難であった。その一方で、第2世代のシェルパの間では、日常言語として、シェルパ語よりネパール語が用いられるようになるとともに、生活習慣や価値観においても、シェルパの伝統的なそれが失われつつあると、第1世代の人々は危機感を抱きはじめていた。



しかし、SSKの集会所が建設され、そこでカトマンズ在住のシェルパによるさまざまな、しばしば大規模な会合がひんぱんに開かれるようになると、状況はかなり変化してきた。まず、それらの儀礼や行事を通じて、シェルパの伝統文化がカトマンズで復活し、シェルパとしての連帯感を強化するとともに、それらが次世代に継承されてゆく可能性も拓かれてきた。また、カトマンズに分散して居住する、異なる地方出身のシェルパが相互に接する機会も格段に増え、それを契機として個別の交流もさかんになっていった。このことは特に職業をもたない女性や高齢者にとって、大きな意味をもっていた。

1970年代の半ばまで、カトマンズに移住し、定着した若い独身のシェルパは、結婚するにあたっては、多くの場合、出身地から女性を呼びよせていたが、しだいにカトマンズ在住のシェルパ間で、出身地に関係なく、婚姻関係が結ばれるようになってゆく。SSKの組織の成立と集会所の建設は、こういった流れを促進したといつてよい。

また、SSKの主催する行事には、参加者は一般に、個人としてというより世帯を単位として参加する。ラワとしての負担を負うことはその具体的な形であり、在来のシェルパの村では、ラワを勤めることは、平等な権利と義務とをもつ独立した村の構成単位としての世帯であることの証明であった(鹿野：1979)が、SSKはその主催する行事にラワ制度を採用することによって、在来の村社会の原理をカトマンズのシェルパ社会に導入し、擬似的ではあれ、それを地域共同体に再編成していったといえよう。

その一方で、こういった地域共同体の内部には、ソル・クンプの村でもそうであるように、一定の階層分化と、とりわけ実力者の間での地位や権力をめぐる争いが存在するが(ORTNER：1989、鹿野：1990)、カトマンズでは階層分化はより著しい。SSKの組織や集会所で催される行事等は、経済的な実力者が、社会的、政治的な名声や宗教的な功德を獲得するために、さまざまなディスプレイを展開する場でもある。経済的、時間的な負担の大きいラワの積極的な引き受け、多額な寄付や布施、大規模な葬式、死者供養の主催といった行為がそれにあたる。もっともそれらは、単に個人の自発的なディスプレイ的行為とばかりもいえない。一般に、経済的に豊かな個人、世帯に対しては、周囲からその経済力にふさわしい負担を負うことへの期待がかかるし、その期待に応えないことに対しては、あからさまではないにせよ、一定の批判、非難がよせられる。こういったシェルパの価値意識も、SSKの組織、事業の発展を支えてきた要因の一つであったろう。

また、SSKの組織と事業の成功の原因を考えるうえでは、上述のようなカトマンズのシェルパの一般的な状況とともに、それらの状況を的確に把握して組織と事業を方向づけていった、発足当時の(そして現在も引き続き中心的存在である)役員集団のリーダーシップのありかたも、見落とすことができない。彼らはすでに述べたように、SSKの設立時にはまだ、30歳代の青年層であり、サーダーなどとして経済的にある程度成功していたとはいえ、安定した資産や社会的名声、政治的権威などをもっていたわけではなかった。すな

わち彼らは、在来の経済的資産や社会的、政治的権威の稀薄な都市の移住者社会だからこそ、リーダーとして台頭しえたといえる。彼ら自身はカトマンズという都市やネパールという国家の体制にも、あるいはより広い意味での近代的状況にも、素早く適応してきた人々であるといつてよい。しかし、彼らは自らを、なお十分にカトマンズに適応しきれないでいた他のシェルパから切りはなし、エリートとして差異化するのではなく (cf.HÖFER : 1978)、むしろ人々の当面する問題を、シェルパの伝統社会と文化を維持し、再生産する場を設置することによって解決し、シェルパとして一体化してゆこうと試みたのである。SSKの組織化やその事業の推進はその具体的あらわれであり、すでに見たように、その運営も可能な限り在来のシェルパ社会の原理や制度を取り入れているが、彼らのリーダーシップのありかた自体についても同様のことがいえる。すなわち彼らは、理事等の役職をSSKの創立以来、長期間に渡って掌握しているが、運営にあたっては個人的に突出した力を発揮せず、むしろ陰の調整者、調停者としての役割に徹しているようにみえる。<sup>11)</sup> SSKの公的な行事などにおいても、表面に出て行事を取りしきるのはラワなどであって、SSKそのものの役職者ではない。SSKの役職者の多くが、カトマンズのシェルパ社会で、役職者であること自体をあまり知られていないことは先にもふれたが、こういった無名性は、彼らのリーダーシップの弱さを示すものというより、むしろ彼らの選択した戦術の結果であり、それ自体がSSKの組織と事業の展開に有利に作用してきたように思われる。

#### IV カトマンズにおけるシェルパ

カトマンズは、その周辺部を含めれば人口60万をこえる(1991年)ネパールの首都であり、政治、経済の中心であって、そこで人口の多数を占めるパルパテ・ヒンドゥーやネワールの上位カーストは、同時に経済的にも、政治的にも、支配的な地位を占めている。カトマンズはまた、国家としてのネパールにきわめて大きな影響力を及ぼしている国際協力や観光といった部門とかかわりをもつ、多くの外国人が滞在する国際都市としての性格も、あわせもっている。さらに、シェルパ以外にも、ネパール北部山地に故地をもつ、さまざまなチベット系民族集団の成員が、それぞれに異なる背景と選択の結果として、カトマンズへ移住して来ている。以下ではカトマンズのシェルパを取りまくこれらの状況と、そこでのシェルパの対応を考えてゆく。

結論からのべれば、シェルパ、とりわけカトマンズでのシェルパのこういった状況への対応は、一方では自らの独自性を維持し続けながら、他方で新しい要素を選択的に、柔軟に受容し、状況に適応してゆくというものであったように思われる。たとえば、シェルパは全体としても、ネパールの国語であり、パルパテ・ヒンドゥーの母語であるネパール語をかなり積極的に受容してきたが、その傾向は、当然のことながらカトマンズでは、より明確である。<sup>12)</sup> SSKはその名称自体もネパール語であり、政府に登録、公認された団体

であって、集会所の一角の事務室には、発録証とともに国王・王妃の写真が掲げられている。しかし、SSKの具体的な活動からもあきらかなように、ヒンドゥー的な文化伝統、価値規範は、カトマンズのシェルパ社会からは、明確に排除されている。

いいかえればSSKの活動は、あきらかにチベット仏教のシェルパの様式の伝統を維持し、再生産してゆくことに重点をおいており、その意味でSSKは、シェルパとその他のチベット仏教徒の間に明確で排他的な境界を設けるといふより、むしろカトマンズに安定した組織や拠点をもたないチベット仏教徒成員を、シェルパの周辺にゆるやかな形で結びつけ、さらに自らを、仏陀生誕祭への参加の形が示すように、仏教徒全体の中へ組みこんでゆくという方向性を維持してきたといえよう。シェルパという民族集団は、もともとソル・クンプやダージリンにおいても、比較的等質的なチベットの文化をもつ人々を、その周辺部へ容易にとりこんでしまう、それも「真正な」シェルパの周辺に「擬似」シェルパを認める（FÜRER-HAIMENDORF：1964、OPPITZ：1968）というだけでなく、状況によっては、ヨーロッパ人やバルバテ・ヒンドゥーなどによる、外からのゆるやかであいまいな「シェルパ」というカテゴリーの認識、分類を、自らに不利にならない限りにおいて受け入れてきたという歴史をもつ（鹿野：1993）が、カトマンズにおいても同様のプロセスを経てきたといってもよいであろう。

だが、シェルパにおいては、こういったチベット仏教を核として自集団のアイデンティティを維持、強化し、場合によってはその境界をも拡張してゆくことは、他方で、典型的には欧米的な様式と内容をもつ近代的な文化を、可能な限り積極的に取り入れてゆくことと、必ずしも矛盾しない。それは一般の生活習慣（例えば衣食住）の西欧化のみならず、英語などの外国語習得や高等教育への熱意の高さなどにも示されている。ここで注目されることは、こういった西欧的近代的文化の積極的な取り入れの一方で、カトマンズのシェルパ社会においては、かつてのダージリンや現在のソル・クンプのシェルパ社会と比べても、外国の組織や個人などへの依存から、相対的に脱却している点であろう。そのことは、典型的には、すでに述べたように、SSKの2度にわたる大規模な建設事業のありかたに示されている。おそらくそれは、彼らの経済的基盤が、かつてのダージリンや現在のソル・クンプのそれに比べ、より多様化、自営化していることとも関係していよう。

要するに、ネパールの首都であり、国際的な観光都市でもあるカトマンズにおいて、新来の少数者であるシェルパは、ダージリン時代以来培ってきた外国人観光客とのつながりを通じて築いた一定の経済的基盤の上に立って、ネパールという国家の忠実な国民的構成要素であることをアピールするポーズと、近代化する経済的、社会的状況への適応と、そしてチベット仏教を核とする伝統文化の存続とを、それぞれに追求しつつ、全体としてバランスを維持することによって、集団としての社会的安定と発展をはかってきたように思われる。それらの要素は、すでにのべたように、たしかに必ずしも相互に矛盾するとはい

えないものの、いうまでもなく、そのバランスを維持することは、決して容易なことではないはずである。カトマンズのシェルパ社会は、出身地も現在の居住地も一様でなく、職業も多様化しており、世代による生活様式や価値観の差も、当面はいよいよ拡大しつつある。こういった多様性の上に維持されてきた微妙なバランスが、今後どのような要因によってどう変化してゆくか、それを予測することは、現段階では、筆者の能力を越える。

## V おわりに

近年、ネパールの山地部においても経済的、政治的な国家への組み込みが進み、それと同時に首都としてのカトマンズの機能があらゆる面で強化されつつある。その結果、シェルパに限らず、村落に住んでいた、さまざまなチベット系ないしチベット・ビルマ諸語を母語とする民族集団の人々の、カトマンズへの移住、定着も進行しつつある。それらの人々のおかれている状況は、個々には異なるにせよ、全体としては、彼らのいずれもがカトマンズにおいて絶対的な少数者であり、かつ、そこでの多数者であるパルパテ・ヒンドゥーやネワールの上位カースト成員からは、社会的な下位者とみなされている点で共通している。こういった人々についての具体的な資料に基く研究はまだ少いが、例えば、シェルパと同じく、かつてヒマラヤ越えの交易を重要な生業としてきた、中西部ネパール高地の住民であるニシャンバ (Nyishangba) やタカリー (Thakali) の場合には、1960年代以降、その交易活動の重点を東南アジアやインド方面とのそれに移すにともない、少なくとも表面的には、国家権力そのものへの接近や、その中枢を握るパルパテ・ヒンドゥーの文化への同化を強めてきたとされる。もっともそのプロセスは単純ではなく、同化そのものはしばしば主体の演技ないし操作であり、また集団や個人は、しばしば内部に葛藤を抱え、矛盾した行動をし、分裂の契機を内包することも、個別には指摘されている。<sup>13)</sup> 要するにそこでの変化は状況によって規定されながら、主体の側の一定の判断、選択を通じてなされた対応の結果なのであり、一方的に状況に決定されて生じたわけではない。ニシャンバやタカリーについても、そのカトマンズでの実態についての資料は乏しく、本稿でもシェルパとの比較を行う用意はないが、今後、山地の村落から都市、とりわけカトマンズへ移動し定着した人々についての資料が集積してゆくことにより、カトマンズのシェルパそのもののありかたの独自性も、より鮮明に浮かび上がってくると思われる。こういった比較も、今後の変化とともに、将来の課題としておきたい。

## 謝 辞

シェルパ・サーヴィス・センターに関する資料については、同理事会議長ソナム・ギャルツェン (Sonam Gyaltzen) 氏と、書記のゴカルナ・プラダン (Gokarna Pradhan) 氏に、懇切な教示と資料閲覧についての協力を頂いた。記して心より感謝の意を表したい。

## 注

1) 例外としては断片的であるがFISHER: 1990の記述がある。

2) シェルパのカトマンズの人口を正確に把握するのは困難であるが、手がかりとしては、後述のSSKの会員数(表-1、2参照)の他、センサスの母語別人口(注の表-1)がある。センサスの言語分類には「シェルパ、ボテ(チベット系諸語を指すと思われる)」が一括されており、表の数値がそのままカトマンズのシェルパの人口増加を示すものではないが、ある程度の傾向は読みとれよう。

なお、1981年のカトマンズ郡とソル・クンプ郡のシェルパ、ボテを母語とする人口の性、年齢別構成からは、なおカトマンズにおける人口の性、年齢構成のかたより(男性の青壮年の高い比率)がよみとれる(注の表-2)。

3) この点ではネパール政府や外国からの援助をうけてカトマンズ郊外やその他の地域の「難民キャンプ」に集住し、そこに独自の僧院や寺院を持つようになったチベット人難民の方が、むしろ恵まれていたといえる。カトマンズのシェルパも、1970年代半ばまでは必要に応じて、チベット人難民地区の寺院を借りて葬式を行っていたという。

4) 注2)参照。なお、H.M.G.: 1992(1991年のサンプル調査)によれば、自らを「シェルパ」とする者で、実際にシェルパ語を母語とする者は約70%である。

5) ヨーロッパへの留学の多くは、高所ポーターやガイドなどで得たヨーロッパ人顧客の縁故を頼って送り出される。

6) STEVENSによれば、クンプにおいてシェルパが経営するロッジの数は、以下のように増加した。1973-7、1978-19、1983-47、1986-62、1991-81(STEVENS: 1993, 365)。

7) 「シェルパ」という民族集団は、すでに筆者も指摘したように(鹿野: 1993)その周辺部において境界があいまいである。SSKの会員には、ランタン(Lantang)やヘラシブー(Helambu)出身のシェルパを自称する人々は含まれていないが、例外的にワルン(Walung)やダージリン出身のチベット人などは何名か入会を認められており、特にワルン出身の1名は、創立メンバーの1人で、役員にも選出されている。この場合は、本人が高所登山のサーターとしての経歴があり、有力なシェルパと個人的に親しかったことが理由とされる。

8) この点は、ソル・クンプでのさまざまな開発計画が、欧米、日本などの個人、団体の協力の下に行われることが多かったのと対照的である(cf. ORTNER: 1989, 163-167)。

9) ソル・クンプやその周辺地域での年中行事やその実施組織等については、FÜRER-HAIMENDORF: 1964、ORTNER: 1978、鹿野: 1979など参照。

10) カトマンズにはチベット人(集団)の所有する僧院、寺院などは多くあるが、宗派や出身地などから、それらとのつながりの薄い人々もいるようである。ネパールのチベット系民族の中では、例えばマナン(Manang)出身の人々が、カトマンズに独自の組織と集会所を所有している。

11) 在来のシェルパ社会のリーダーシップのありかたについては、DRAPER: 1988、FÜRER-HAIMENDORF: 1964、ORTNER: 1978、1989、鹿野: 1979、1990など参照。

注の表-1 シェルパ、ボテを母語とする人口

	1981	1991
ネパール	73,589	121,819
カトマンズ郡	1,664	6,063
ソル・クンプ郡	15,166	19,328

(H. M. G. : 1984, 1993)

注の表-2 シェルパ、ボテを母語とする人口の性・年齢別構成(1981)

年 齢	0~14	16~64	65~	計	
カトマンズ郡	男	302	597	25	924
	女	257	462	21	740
	計	559	1,059	46	1,664
ソル・クンプ郡	男	3,007	4,427	278	7,712
	女	2,826	4,372	256	7,454
	計	5,833	8,799	534	15,166

(H. M. G. : 1984)

- 12) 1991年のセンサス（サンプル調査）によれば、自らを「シェルパ」とした者のうち、ネパール語を母語とする者の比率は18.9%で、リンブー（16.4%）、タマン（17.0%）、ジレル（12.9%）などより高い。都市部だけに限れば、シェルパのなかでネパール語を母語とする者の比率は30.0%となる（H.M.G. : 1992）。
- 13) マナン地方出身のニシャンバについては COOKE : 1986、SPENGEN : 1987、タク・コーラ（Thak Kholā）地方出身のタカリーについては CHHETRI : 1986、MANZARDO : 1982、飯島 : 1982などによる。

### 参 考 文 献

- BROWER, B.  
1991 *Sherpas of Khumbu—People, Livestock and Landscape*, Oxford University Press.
- CHHETRI, R. B.  
1986 Migration, Adaptation and Socio-Cultural Change : The Case of Thakalis in Pokhara, Nepal, *C.N.S.* 13-3, 239-260.
- COOKE, M. T.  
1986 Social Change and Status Emulation among the Nisyangte of Manang, *C.N.S.* 13-1, 45-56.
- DRAPER, J.  
1988 The Sherpas Transformed ; Toward a Power Centered View of Change in Khumbu, *C.N.S.* 15-2, 139-162.
- FISHER, J. F.  
1990 *Sherpas ; Reflection on Change in Himalayan Nepal*, University of California Press.
- FÜRER—HAIMENDORF, C. VON.  
1964 *The Sherpas of Nepal*, John Murray.  
1984 *The Sherpas Transformed*, Sterling Publishers.
- H.M.G.  
1984 *Population Census 1981, Social Characteristic Tables* vol. I. Part III.  
1992 *Population Census 1991, Advance Table*, vol. 1.  
1993 *Statistical Year Book of Nepal 1993*
- HÖFER, A.  
1978 A New Rural Elite in Central Nepal, in FISHER, J. F. ed. *Himalayan Anthropology*, Mouton Publishers, 179-186.
- MANZARDO, A. E.  
1982 Impression Management and Economic Growth ; The Case of the Thakalis of Dhaulagiri Zone, *Kailash*, 9-1, 45-60.
- OPPITZ, M.  
1968 *Geschichte und Sozialordnung der Sherpa*, Universitätsverlag Wagner.
- ORTNER, S. B.  
1978 *Sherpas through Their Rituals*, Cambridge University Press.  
1989 *High Religion ; A Cultural and Political History of Sherpa Buddhism*, Princeton University Press.

PFLIEDRER, B. & E. BERGNER, ed.

1990 *A Bibliography of Himalayan Ethnography*, Frantz Steiner Verlag, Stuttgart.

SPENGEN, W.

1987 The Nyishangba of Manang, *Kailash*, 13-3.4, 131-277.

STEVENS, S. F.

1993 *Claiming the High Ground—Sherpas Subsistence and Environmental Change in the Highest Himalaya*, University of California Press.

飯島 茂

1982 『ヒマラヤの彼方から—ネパールの商業民族タカリー生活誌』、日本放送出版協会。

鹿野勝彦

1975 「ヒマラヤ登山におけるシェルパの位置づけ」、『岩と雪』41, 20-29.

1979 「ロールワリン・シェルパの経済と社会」、『リトルワールド研究報告』3.

1985 「ダージリン・ノート」、『東海山岳』5, 日本山岳会東海支部, 173-184.

1986 「登山・観光」、石井溥編『もっと知りたいネパール』, 弘文堂, 269-288.

1990 「定期市における経済関係と社会関係—ネパール山地の事例から」、阿部年晴・伊藤亜人・荻原真子編『民族文化の世界』下, 小学館, 33-54.

1993 「シェルパと観光—20世紀初頭から1980年代まで」、『金沢大学文学部論集行動科学科篇』13, 95-116.

C.N.S.—*Contributions to Nepalese Studies*.

H.M.G.—His Majesties Government, Nepal.